

Title	福岡市若年層方言のデハナイ(カ)相当形式に見られる方言接触
Author(s)	平塚, 雄亮
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 43 p.55-p.72
Issue Date	2009-12-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7884
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

福岡市若年層方言の デハナイ（カ）相当形式に見られる方言接触

平 塚 雄 亮

1. はじめに

本稿では、福岡市若年層方言の標準語のデハナイ（カ）に相当する形式を対象に、そこに見られる方言接触について自然談話資料を用いて論じる。具体的には、デハナイ（カ）がカバーする用法を担う標準語形ジャナイ¹⁾、福岡市方言形ヤナイ²⁾に加え、伝統方言では聞かれなかった新形式ヤン³⁾、さらに東京方言形ジャンを分析対象とし、それぞれの変種が織りなす複雑な接触方言体系について論じる。これまでの福岡市方言を対象とした研究では、以上のような形式が使用されるようになってきているという事実は報告されていても、それぞれの形式がどういった用法をカバーしているかといったところまで踏み込んだものは見当たらない。本稿のようにデハナイ（カ）相当形式のバリエーションがいったいどういった用法を担っているのかに注目することで、接触した変種どうしの相互的な作用、つまり、接触方言の形成という観点から言語変化を観察することができると思われる。

以下、まず2節で調査概要について述べる。次いで3節で分析の枠組みについて述べたうえで、4節で具体的な分析に入る。5節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 調査概要

本稿では、できるだけ実際の言語使用状況を写し取ることを目的としているため、アンケートなどでの使用意識を問うものではなく、筆者の収集した自然談話資料（以下「談話」）を用いて分析を行うことにする。以下にその概要を述べる。

談話はインフォーマント17名（男性8名、女性9名）による9本である（表1参照）。基本的には親しい同性のペア（2名）での談話であるが、0701Mの談話のみ男性3名によるものである。また、FUYは0801Mと0803Mの2つの談話に、YONは0804Fと0806Fの2つの談話に参加している。談話収録時にはインフォーマント全員が福岡市に居住しており、実家も福岡市にあることを確認している。高木（2006）が述べるように、インフォーマントの居住歴、言語的背景については「多様性」こそが現在の大都市方言の特徴であると考えたため、インフォーマントは生え抜きだけに限定しているというわけではなく、居住歴はさまざまである。つまり、本稿では福岡市に居住する若年層ネイティブ・ノンネイティブが使用している混ざり合った方言体系を「福岡市若年層方言」としている。談話に参加したインフォーマントのうち、言語形成期を福岡市以外で過ごしたのは0701MのTEK（主に熊本県熊本市）、0802FのTAK（長崎県島原市）、0805FのFUH（神奈川県）、0901MのKUM（東京都青梅市）であるが、本稿で分析するデハナイ（カ）相当形式の使用について言えば、これらすべてのインフォーマントは生え抜きのインフォーマントと比べて特に違いは見られなかった。既に当該方言を習得済みであると思われる。なお、談話収録中は筆者は同席していない。すべての談話のうち本稿で分析対象とした部分の合計時間は、6時間8分38秒である。

表1 談話情報とインフォーマントの属性

談話 ID	話者 ID	生年(調査時年齢)	居住歴	談話時間
0701M	HIH	1986(20歳)	0- 福岡県福岡市	41分26秒
	SAK	1986(20歳)	0-8 福岡県福岡市 8-10 宮崎県宮崎市 10-13 鹿児島県姶良郡 13- 福岡県福岡市	
	TEK	1986(20歳)	0-6 熊本県熊本市 7-8 福岡県福岡市 9-11 鹿児島県鹿児島市 11-14 熊本県熊本市 15- 福岡県福岡市	
0801M	HAS	1982(25歳)	0-1 三重県四日市市 2-3 東京都 3-18 福岡県福岡市 18-20 東京都府中市 20-21 イギリス 22-23 東京都国分寺市 24- 福岡県福岡市	43分28秒
	FUY	1982(25歳)	0- 福岡県福岡市	
0802F	TON	1982(25歳)	0- 福岡県福岡市	42分47秒
	TAK	1979(28歳)	0-18 長崎県島原市 19- 福岡県福岡市	
0803M	FUY	1982(25歳)	0- 福岡県福岡市	31分21秒
	MAG	1982(25歳)	0-6 長崎県 6-18 福岡県福岡市 18-23 千葉県市川市 23- 福岡県福岡市	
0804F	INM	1982(25歳)	0- 福岡県福岡市	52分36秒
	YON	1982(25歳)	0- 福岡県福岡市	
0805F	HAW	1983(25歳)	0-18 福岡県福岡市 18-22 大阪府箕面市 22-23 鹿児島県熊毛郡 24- 福岡県福岡市	38分34秒
	FUH	1982(25歳)	0-5 神奈川県横浜市 5-15 神奈川県秦野市 15-24 福岡県福岡市 24-24 埼玉県和光市 24- 福岡県福岡市	
0806F	GOA	1982(25歳)	0- 福岡県福岡市	49分49秒
	YON	1982(25歳)	0- 福岡県福岡市	
0901M	KUM	1987(21歳)	0-15 東京都青梅市 16- 福岡県福岡市	42分32秒
	MAR	1986(22歳)	0- 福岡県福岡市	
0902F	FUN	1986(22歳)	0- 福岡県福岡市	26分5秒
	HAN	1986(22歳)	0- 福岡県福岡市 1-2 埼玉県 3- 福岡県福岡市	

*談話 ID の初めの 2 桁の数字は収録年（例：07→2007年）。

次の 2 桁は収録年の通し番号。番号の後の M は男性，F は女性を表す。

3. 分析の枠組み

ここでは、デハナイ（カ）相当形式の分析に用いた枠組みについて述べる。本稿ではデハナイ（カ）を分析する際の枠組みとして、基本的には田野村（1988）の分類を採用する。田野村（1988）はデハナイ（カ）の用法を3つに分け、それぞれデハナイ（カ）Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類とラベリングしており、それぞれ次のようなものである。

- (1) デハナイ（カ）Ⅰ類：発見した事態を驚きなどの感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するように相手に求めたりするもの。否定辞ナイを含むとはいえ、前にくる表現の内容が否定されているわけではない。用言・体言⁴⁾を問わず接続する。

よう、山田ジャナイ（カ）。

何をする、危ないジャナイ（カ）。

自分から言い出したんジャナイ（カ）。

- (2) デハナイ（カ）Ⅱ類：推定を表現する。この場合も、話し手は前の表現の内容を否定してはおらず、むしろそれを認める方に傾いている。用言に接続するときには必ず準体助詞を要するが、体言に接続する場合には準体助詞を省略することができる。

（不審なようすから）どうもあの男犯人（ナン）ジャナイ（カ）？

（空模様を見て）このようすだと、明日は雨（ナン）ジャナイ（カ）？

- (3) デハナイ（カ）Ⅲ類：ナイが否定辞の性格を発揮する。体言のみに接続する。

（1は素数ではないことを教えられて）そうか、1は素数ジャナイ（カ）。

（1ガ素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ）本当に1は素数ジャナイ（カ）？

以上のような3分類に加えて、本稿では高木(2006)のようにデハナイ（カ）に「同意要求」という用法を設ける。本稿で用いる同意要求という用語は、基本的には安達(1999)の用いる「同意要求型の否定疑問文」や、高木(2006；2009)、平塚・原田(2008)、平塚(2009)の用いる「同意要求」と共通しているが、本稿では以下のように定義する。

- (4) 同意要求：話し手と聞き手がある事態について対等の情報量を持つことができる状態であることを前提に、話し手と同じ判断を形成していることを聞き手に問いかける。体言のみに接続する。

一輪車に乗ることぐらい、簡単ジャナイ（カ）？

夏と言えば、やっぱり海ジャナイ（カ）？

同意要求は述語の否定形式を利用して用いられるため、この用法においてデハナイ（カ）は体言にしか接続できない。述語が用言の場合には、

- (5) この問題の答え、違わナイ（カ）？

- (6) この部屋、ちょっと寒クナイ（カ）？

のように表わされ、デハナイ（カ）が用いられることはない。

本稿で分析の対象とするジャナイ・ヤナイ・ヤン・ジャンが持つ用法は、以下のように整理される。実際に福岡市方言でその用法を持つかどうかは不明であるが、ジャンの用法は松丸(2001)を参考にした。

表2 デハナイ（カ）相当形式の用法

	I類	II類	III類	同意要求
ジャナイ	○	○	○	○
ヤナイ	○	○	○	○
ヤン	○	—	—	—
ジャン	○	○	—	—

*○はその用法があることを、—はないことを示す。

- (7) 今日は晴れると思ったのに、雨 {ジャナイ／ヤナイ／ヤン／ジャン} 。 【Ⅰ類】
- (8) ひょっとしたら、この男が犯人 {ジャナイ／ヤナイ／*ヤン／ジャン} ？ 【Ⅱ類】
- (9) これは私の傘 {ジャナイ／ヤナイ／*ヤン／*ジャン} 。 【Ⅲ類】
- (10) 一輪車に乗るぐらい、簡単 {ジャナイ／ヤナイ／*ヤン／*ジャン} ？ 【同意要求】

4. デハナイ（カ）相当形式の使用実態

本節では、3節で用法を整理したデハナイ（カ）に相当する形式ヤナイ・ヤン・ジャンが、実際にはどのように使用されているのかについての分析を行う。まず4.1節で談話における各形式の用例数と用法について確認したうえで、4.2～4.5節ではそれぞれの用法ごとに考察を加えていく。最後に4.6節で、デハナイ（カ）に相当する各形式の使用の実態についてまとめる。

4.1. 各形式の用例数と用法

談話に現れたデハナイ（カ）相当形式は全部で476例であった。各形式の用例数は、以下の表3の通りである。

表3 各形式の用例数

形式	ジャナイ	ヤナイ	ヤン	ジャン	合計
用例数	151	91	223	11	476

表3を見る限り、標準語形であるジャナイや、新形式ヤンが目立って多く使用されていることが分かる。伝統方言形であるヤナイの使用はジャナイ

に比べるとあまり多くないこと、東京方言形のジャンがわずかながら使用されていることも指摘できよう。では、それぞれの形式が担っている用法はいったいどのようなものなのであろうか。談話に現れた各形式の用法を、表4として示す。

表4 各形式の用法別の用例数

	I類	II類	III類	同意要求
ジャナイ	5	33	108	5
ヤナイ	1	71	3	16
ヤン	223	—	—	—
ジャン	11	0	—	—
合計	240	104	111	21

表4を見ると、3節で述べたようなすべての用法をカバーするジャナイとヤナイが、実際には用法ごとの用例数に偏りがあることが分かる。以下、それぞれの用法ごとに形式の使われ方を詳しくみていくことにする。

4.2. デハナイ（カ）I類について

まず、デハナイ（カ）I類について見ることにする。この用法では、新形式ヤンが223例と、他の形式に比べ圧倒的に多く使用されていることが分かる（用例中の「？」は上昇イントネーションであることを示す）。

- (11) INM：力任せにいろんなことをやろうとする人おるヤン？

【0804F】

- (12) HAW：福岡にずっとおるのもつまらんヤン？

【0805F】

- (13) YON：両方とも新しい環境になるわけヤン？

【0806F】

他の形式の用例に目を向けてみると、ジャナイが5例使用されているが、

- (14) のように丁寧体の中で使用されたものであった。

- (14) HHH：いいジャナイですか。

【0701M】

残りの4例は(15)のように第三者（年長者）の発話を引用したものであっ

たため、インフォーマント自身が使用したと言えるものではない。

(15) GOA : 「そうって言ってるジャナイですか。」 みたいな。

また (16) に示すヤナイ 1 例についても、第三者（年長者）の発話の引用であった。

(16) INM : 「おまえは立派な働き盛りのサラリーマンヤナイか。」 っ
て言われて。 【0804F】

このように、デハナイ（カ）Ⅰ類におけるジャナイとヤナイの使用については例外的であったと言える。

この用法においてわずかながら用例が見られた東京方言形ジャン11例に関しては、

(17) TON : 「どうせ彼氏と喧嘩しかしてねージャン。」 っつって。 【0802F】

のように他者の発話を引用したものが1例あったものの、残りの10例はインフォーマント自身の発話の中での使用であった。既に2節で述べたように、インフォーマントの中には言語形成期を東京で過ごした KUM, 神奈川で過ごした FUH や、東京での居住歴を持つ HAS, 千葉での居住歴を持つ MAG など含まれている。しかしながらジャンの使用はこれらのインフォーマントだけに見られたものではなく、福岡市生え抜きの YON, GOA, MAR にも見られている。

(18) YON : なんかあるジャン? 【0804F】

(19) GOA : 私の、ほら、携帯ってさ、見えるジャン? 【0806F】

(20) MAR : 責任ジャン。 【0901M】

特に (21) などは否定辞ンが用いられた動詞述語と共起しており、伝統方言との混交の用例も見られている。

(21) GOA : いらんジャン? 【0806F】

デハナイ（カ）Ⅰ類においてジャナイとヤナイがほとんど使用されていな

いことを考えると、談話の中に観察された用例としては数が少ないものの、決して無視できる数ではないため、ここに東京方言形が進出し始めているのではないかということを感じさせるものである。

4.3. デハナイ（カ）Ⅱ類について

続いて、デハナイ（カ）Ⅱ類についての考察を行う。この用法においては、東京方言形ジャンの使用は見られず、ジャナイが33例⁵⁾、ヤナイが71例⁶⁾見られた。ここで、それぞれの前接要素の違いに焦点を当ててみると、実は規則的にジャナイとヤナイが使い分けられていることが分かる。以下、用言に接続するときと体言に接続するときに分けて説明を加える。

4.3.1. 用言に接続する場合

まず、ジャナイ／ヤナイが用言に接続する場合について示したのが表5である。

表5 用言に接続するときのジャナイ／ヤナイの用例数

	用言＋ン	用言＋ト
ジャナイ	16	0
ヤナイ	4	48
合計	20	48

表5から明らかなように、用言とジャナイ／ヤナイの間に介する準体助詞が標準語形のン⁷⁾の場合にはジャナイ⁸⁾が、方言形のトの場合にはヤナイが、というように使い分けられている様相が見られる。前者の例を（22）～（24）、後者の例を（25）～（27）として示す。

- （22）HHH：選べるンジャナイと？ 【0701M】
 （23）INM：1年の疲れがたまったンジャナイかなと。 【0804F】
 （24）FUN：いいンジャナイ？ 【0902F】

(25) TEK : もういいッチャナイ? 【0701M】

(26) INM : 最低5年はおるッチャナイかな。 【0804F】

(27) HAN : どうでもいいッチャナイかなとか思ってきてさー。
【0902F】

これは、標準語形には標準語形を、方言形には方言形をというふうに、いわば接続のし方の相性のようなものが存在していることに起因する現象であろう。またトヤナイは、すべてッチャナイという音声的に融合した形でしか現れなかったことから、トとヤナイの形態的な結びつきが強いことが、準体助詞がトのときにはヤナイが選択される最大の要因になっていると言える。なお、用言＋ンの場合にヤナイが用いられたのは4例のみであった。(28)として用例を挙げておく。

(28) FUH : 紹介とかもしてくれるンヤナイかね? 【0805F】

4.3.2. 体言に接続する場合

一方、前接要素が体言の場合についても、準体助詞を介する場合には用言に接続する場合と同じことが言えそうである。福岡市若年層方言においては、準体助詞トに体言が接続することが可能であるため（陣内・坪内1995，陣内2006，原田2007など），〈体言＋ト＋ジャナイ／ヤナイ〉のような表現も可能である。しかしながら，談話においては用例が見られなかった。

表6 体言に接続するときのジャナイ／ヤナイの用例数

	体言＋ン
ジャナイ	4
ヤナイ	0
合計	4

(29) TAK : みたいな感じナンジャナイの? 【0701M】

(30) YON : 自由ナンジャナイ? 【0804F】

(31) INM : なんか訳ありナンジャナイかと思ってしまうん?
【0804F】

(32) FUH : 言いたいだけナンジャナイの? 【0805F】

用例数が4例と極端に少ないのではっきりしたことは言えないかもしれないが、ここでも用言の場合と同様に、準体助詞が標準語形のンであるためジャナイのみが用いられているという実態が垣間見えそうである。

なお、前接要素が体言の場合で、準体助詞を介さない場合については、ジャナイは13例、ヤナイは18例であり、ここでは特にジャナイとヤナイの使い分けに関わるような要因が考えられなかった⁹⁾。前者の例を(33)～(35)、後者の例を(36)～(38)として示す。

(33) SAK : あれジャナイと? 【0701M】

(34) HHH : キャプテンジャナイ? 【0701M】

(35) FUY : 餃子ジャナイ? 【0803M】

(36) YON : 買い替えどきヤナイ? 【0806F】

(37) MAR : 4番候補ヤナイと? 【0901M】

(38) KUM : 野球しとうけんヤナイ? 【0901M】

4.3.1節で述べたように、用言に接続する場合には必ず準体助詞を選択しなければならないため、それに合わせて自動的に標準語形ジャナイか伝統方言形ヤナイが選ばれることになる。一方、体言に直接接続する場合はその制約がないため、ジャナイ／ヤナイは比較的自由に選択されるのであろう。この使い分けにどういった要因が働いているのか、今後データを増やしたり、社会言語学的な観点も考慮に入れたりするなどして注目していきたい。

4.4. デハナイ（カ）Ⅲ類について

デハナイ（カ）Ⅲ類においては、標準語形であるジャナイ（108例）がその用法をほぼ独占して担っている。この用法においてヤナイが使用されたのは、(39) のような3例しか見られなかった。

(39) TEK：雨ヤナカッタら、行くかもしれんけど。 【0701M】

このようにヤナイを使用したインフォーマントも、

(40) TEK：接客とかジャナイけんね。 【0701M】

のように、ジャナイも用いている(4例見られた)。このようにデハナイ（カ）Ⅲ類の用法においては、標準語形ジャナイが使用されており、伝統方言形ヤナイは使用されなくなっていると言える。関西若年層方言においてもデハナイ（カ）Ⅲ類においてヤナイの使用がほとんどなくなり、主にジャナイがそれを担うようになっているという（高木2006）。しかし福岡市若年層方言においては、4.3節で述べたデハナイ（カ）Ⅱ類、4.5節で述べる同意要求においてはむしろヤナイが盛んに用いられている。デハナイ（カ）Ⅱ類と同意要求がモダリティに関わる用法である一方、デハナイ（カ）Ⅲ類は実際にはモダリティに関わらず命題に関わる用法であるため、方言的要素（ヤナイ）が消えやすく、標準語形に置き換わりやすいのかもしれない。

4.5. 同意要求について

最後に、同意要求の用法（21例）についてみる。この用法では、ジャナイが5例、ヤナイが16例見られた。前者の例を(41)～(43)、後者の例を(44)～(46)として示す。

(41) SAK：だいたいみどりの日ジャナイ？ いっつも。 【0701M】

(42) TON：無駄ジャナイ？ 【0802F】

(43) TAK：暇そうジャナイ？ 【0802F】

(44) SAK：名前負けしてそうヤナイ？ 【0701M】

(45) MAR：1年だけヤナイ？ 【0901M】

(46) KUM：もっとできそうヤナイ？ 【0901M】

高木（2006）によると、同意要求は述語の否定形式を利用して表現されることから、関西若年層方言においては、否定（デハナイ（カ）Ⅲ類）において多用される形式が同意要求においても多数を占めるとされている¹⁰⁾。この考えにしたがえば、福岡市若年層方言においても同意要求の用法を担うのは、4.4節で示したデハナイ（カ）Ⅲ類（否定）の用法をほぼ独占しているジャナイであるということになる。しかしながら、否定の用法を占めているジャナイが5例に対し、実際にはそれを担わないヤナイは16例見られることから、高木（2006）の言うような「否定の用法において多用される形式が同意要求においても多数を占める」という考えは福岡市若年層方言においては当てはまらないようである。同意要求の用例が少なかった¹¹⁾ことから、いったいこういった要因がジャナイ／ヤナイの使い分けに関わっているのかを分析するといった踏み込んだ議論は非常に難しい。今後面接調査などでその実態にアプローチする必要があるようである。

4.6. デハナイ（カ）相当形式の受容と棲み分け

ここまで4節で述べてきたことをまとめると、談話から得られたデータをもとにしたデハナイ（カ）相当の形式と用法の関係は、以下のように表される（形式が2つ並んでいるときは、左の形式の方が多用される）。

表7 デハナイ（カ）相当形式の棲み分け

用法	形式	
I類	ヤン（ジャン）	
II類	準体助詞ン	ジャナイ
	準体助詞ト	ヤナイ
	準体助詞Φ	ヤナイ／ジャナイ
III類	ジャナイ	
同意要求	ヤナイ／ジャナイ	

この表から、標準語形ジャナイに加え、伝統方言形ヤナイ、新形式ヤン、そしてわずかながら東京方言形ジャンが使用されるという体系の様相をうかがい知ることができる。言い換えると、1つの形式（ヤナイ）がすべての用法を担っていた体系が、他変種からの形式を受容することで、多様な形式（ジャナイ・ヤナイ・ヤン）を用いて用法の分担を行う分析的な体系へと変化しつつあるようである。本稿ではその出自について態度を保留したが、もしヤンが関西方言から受容されたものであるとしたら、福岡市若年層方言は標準語、東京方言、関西方言を取り入れつつ、伝統方言形も利用した体系を成していることになる。

5. まとめと今後の課題

本稿では自然談話資料をデータに、田野村（1988）の分類をもとに福岡市若年層方言における標準語のデハナイ（カ）相当形式の使用実態について論じた。本稿で明らかになったことは、以下の点である。

- (a) デハナイ（カ）Ⅰ類においては、新形式のヤンが使用される。ただし、東京方言形のジャンもわずかながら使用されている。
- (b) デハナイ（カ）Ⅱ類においては、準体助詞が標準語形のンならば標準語形のジャナイが、伝統方言形のトならば伝統方言形のヤナイが選択される。後者のパターンには、トヤナイがッチャナイという融合した形式で使用されることが強く関わっている。準体助詞を介さない場合は、標準語形のジャナイと伝統方言形のヤナイの両方が使用される。
- (c) デハナイ（カ）Ⅲ類においては、標準語形のジャナイが使用される。
- (d) 同意要求においては、標準語形のジャナイと伝統方言形のヤナイの両方が使用される。

このように、本稿ではそれぞれの形式が担う用法について実態の解明を行うことができたわけであるが、なぜその用法を担うようになったのかについて考えなければならない。合わせて、新形式ヤンについても考える必要がある。以上を今後の課題とする。

注

- 1) 福岡市高年層方言ではジャナカ、中年層ではヤナイという否定辞が用いられているが、本稿では若年層の用いるジャナイは標準語からもたらされたものであるとする。一旦ジャ→ヤという変換規則（陣内1996）が働いた以上、ヤ→ジャという逆方向の作用が起こるとは考えにくく、標準語から取り入れたと考える方が自然であるからである。
- 2) 福岡市若年層方言においては、「ヤナイカ」のようにカが付加されるのはあまり一般的ではないため、分析の対象とするすべての形式を「ヤナイ」のようにカを付加しない形で統一して表記することにする。ただし、中・高年層ではカの代わりにネが付加され、「ヤナイネ」のようになることがよくある。
- 3) 陣内（1998）、村上（2001）、杉村（2005）などが関西方言から受容されたものであることを指摘している。ただし、どの研究も関西方言のヤンと語形が一致していることを根拠にしているだけで、関西方言から受容したということを実証した研究はない。陣内（1994；1996）が述べるように内的な変化によって生じた可能性も残されているため、本稿では出自については態度を保留しておき、伝統方言では用いられていなかったことから、単にヤンを「新形式」として扱うことにする。
- 4) 「何を言っているんだ、会議は今日の午後からジャナイ（カ）。」のように、助詞などにデハナイ（カ）が接続する場合もあるが、本稿では便宜的に動詞・形容詞以外の要素を「体言」とする。
- 5) 何も前接させない2例「FUH：ジャナイかね？【0805F】」、「KUM：ジャナイ？【0901M】」を含む。
- 6) 何も前接させない1例「SAK：ヤナイと？【0701M】」を含む。
- 7) この談話に見られたように、福岡市方言においてもンという準体助詞が使われるようになってきているようである。
- 8) 用言＋ンの例が「～ンジャナイですか」のような丁寧体であるというわけではなく、16例中15例が普通体で発話されたものである。
- 9) 安達（1999）の「情報要求文」、「情報提供文」といった違いもジャナイ／ヤナイの選択に関わっていないようである。

- 10) 高木 (2006) が示す関西方言の談話資料においては、否定 (デハナイ (カ) Ⅲ類) の79.8パーセントを担うジャナイが、同意要求においても92.6パーセントを占めることが示されている。否定において19.9パーセントしか現れないチャウは、同意要求においても7.4パーセントしか現れない。
- 11) デハナイ (カ) 相当の形式を1,669例集めた高木 (2006) においても、同意要求の用例はわずか27例と数が少ない。

付記

本稿は、2008年度に大阪大学に提出した修士論文の一部に修正・加筆したものである。調査にご協力いただいた方々に、記して感謝申し上げる。

参考文献

- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版。
- 陣内正敬 (1994) 「方言新語発生のタイポロジー」 『北海道方言研究会叢書』 5, pp.38-44, 北海道方言研究会。
- (1996) 『北部九州における方言新語研究』 九州大学出版会。
- (1998) 「九州方言の新動向——九州5都市方言調査より——」 真田信治 (編) 『九州におけるネオ方言の実態』 pp.7-20, 科研費報告書。
- (2006) 「方言の年齢差——若者を中心に——」 『日本語学』 25-1, pp.42-49, 明治書院。
- ・坪内佐智世 (1995) 「地元意識と開放性の共存する都市方言」 『言語』 24-12, pp.150-165, 大修館書店。
- 杉村孝夫 (2005) 「福岡都市圏における関西方言の受容実態」 陣内正敬・友定賢治 (編) 『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』 pp.69-85, 和泉書院。
- 高木千恵 (2006) 「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」 『阪大日本語研究』 別冊2, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。
- (2009) 「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」 『日本語の研究』 5-4, pp.1-15, 日本語学会。
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」 『国語学』 152, pp.109-123, 国語学会。
- 原田走一郎 (2007) 「若年層の福岡方言における「ート」の接続について」 『思言 東京外国語大学記述言語学論集』 2, pp.170-177, 東京外国語大学記述言語学研究室。

平塚雄亮（2009）「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ（カ）」『日本語文法』9-1, pp.71-87, くろしお出版.

———・原田走一郎（2008）「鹿児島県薩摩川内市方言における文末詞センについて」『日本語学会2008年度秋季大会予稿集』pp.41-48, 日本語学会.

松丸真大（2001）「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』3, pp.33-48, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

村上敬一（2001）「コード選択と言語使用」ダニエル・ロング・中井精一・宮治弘明（編）『応用社会言語学を学ぶ人のために』pp.34-41, 世界思想社.

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

**Dialect Contact Observed in Fukuoka Dialect of Young Generation:
With a Special Focus on the Variants of *Dewanai(ka)***

Yusuke HIRATSUKA

In standard Japanese, a negation marker *dewanai(ka)* also functions as recognition, conjecture and agreement-seeking markers according to Tanomura(1988) and Takagi(2006). On the other hand, there are four variants for *dewanai(ka)*, which are *janai*, *yanai*, *yan* and *jan* in Fukuoka dialect of young generation. In this paper, I observed the tendency of the usage of the four variants in free conversations. The result is as follows.

- (a) Recognition: *Yan*, which is not used in the traditional Fukuoka dialect, is mainly used. *Jan*, which is originally used in Tokyo dialect, is also used partly.
- (b) Conjecture: If the standard Japanese quasi-nominal particle *No* precedes, the standard Japanese variant *janai* is preferred. In contrast, if the dialect quasi-nominal particle *To* precedes, the dialect variant *yanai* is preferred. And if there is no preceding quasi-nominal particle, either is used.
- (c) Negation: The standard variant *janai* is used mostly.
- (d) Agreement-seeking: Either of *janai* and *yanai* is used.

In Fukuoka dialect of young generation, these variants are used for the four functions selectively while in standard Japanese, only one form covers all these functions.

キーワード：福岡市若年層方言，デハナイ（カ），方言接触